HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語における新しい名詞転成動詞の研究
Author(s)	佐々木, 香織
Citation	研究論集, 13, 251(左)-270(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/54073
Type	bulletin (article)
File Information	014_SASAKI.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本語における新しい名詞転成動詞の研究

佐々木　香　織

要　旨

一般的に，言語変化は「誤用」「ことばの乱れ」として問題視され，正すべきものであるとみなされることが多い。本研究は，規範から逸脱した語形を単なる「乱れ」ではなく，日本語において現在進行中の言語変化の一端であると位置づけ，その現状や出現の理由を考察することで現代日本語の姿を明らかにしようとするものである。

本稿ではそのような現在進行中の言語変化として，後部要素として動詞連用形を持つ転成名詞が，再び動詞化する例を取り上げて論じる。名詞をそのままの形式で動詞化することを許さない日本語では，従来，名詞に軽動詞「する」を付けるか，「-r」語幹を付けることで動詞化していた。しかし，「ひた走り（に走る）」という名詞から形成された「ひた走る」という動詞が現在定着していることを代表に，様々な名詞転成動詞が存在することを本稿では主張する。ここでは，そのような名詞転成動詞の実例を国会会議録や新聞記事，ウェブサイトから収集し，前部要素と後部要素の関係性に基づいて分類した。その上で，名詞転成動詞は前部要素が様態を表す語であり，後部要素に対して修飾的にはたらくことを強く求めるということを示す。

名詞転成動詞が作りだされる話者の心的要因について本稿は，より負担の少ない簡素な語形を好むという「経済性の原理」と，よりインパクトがあり新規性のある面白い語形にしたいという「創造性の原理」の二つを紹介する。どちらも話者の，日本語に対する内的規則が存在しなければ成立しないものであり，単なる学習不足による間違いではなく，一種の言語変化であると主張する。

1．はじめに

1.1　研究背景

本研究は，日本語において現在進行している言語変化について考察し，その姿を明らかにす

ることを試みるものである。一般に，言語変化は「誤用」「ことばの乱れ」として問題視され，正すべきものであると考えられることが多い。しかし，言語は変化するものであり，いわゆる「ことばの乱れ」はまさにその変化の最中にあるものであると考える。

ここではそのような語形を「進行中の言語変化」であると位置づけ，現在どのような語形が生まれているのか，それがどの程度普及しているのか，なぜそのような語形が生み出されたか，などを考察することを通じて，現代日本語の姿を考察したい。

ことばの変化の広がりについては井上（2008）で次のように述べられている。

① 普及率が少ない段階では「言いまちがい」と片づけられる
② ３分の１くらいの人に広がると「誤用・乱れ」として騒がれる
③ 半数くらいになると「ゆれ」と認定される
④ ４分の３くらいの人に広がると「慣用」として認められる。
⑤ 最後には「正用」扱いになる。

竹林（2011）では「誤用」のパターンを３種類に分けている。

① やむにやまれぬ理由があって変化が生じ，すでに幅広い世代・地域に広がっている言葉づかい
② 言語使用上の大きな不都合を解消する変化ではないが，それなりの理由・必然性があって生じた言葉づかい
③ 単なる学習不十分による言葉づかい

①は言語使用上の大きな不都合を解消する変化で，いずれ普通の日本語として定着すると思われるものであると述べ，例として「ラ抜き言葉」を挙げている。②は，普通の日本語として定着するか否か不明であり，今後，広がり方を観察していかなければわからないとしている。例としては「サ入れ言葉」を挙げている。

新しい語形が生まれることについて，真田（2006）は，自律的な言語変化の動機には，言語の経済性と創造性という２つの相反する方向の力があると述べている。言語の経済性に基づく変化は，音声面では発音負担をより軽減化し，文法面ではより記憶負担を軽減化する単純な規則を整える方向への変化を促す。一方，使い古しの表現が新しい表現に駆逐されるなどの創造性に基づく変化も起こるとしており，それを創造性と呼ぶ。

また，「誤用」は国広（2010）で以下の２つに分類されている

個人型誤用　個人の学習が不十分であることが要因で起こる

単発的なもので，気づいたり指摘されたりしたときに直してしまえば終わりであるもの。

波頭型誤用　一般的な言語変化の波の先端部分に位置するもの。
かなり広く行き渡ってしまったもので，教育などで押しとどめることは難しいもの

本論文では「長い目で見ればことばの変化の先駆けである」ものを「波頭型語形」と呼ぶこととする。本論文は変化の途上にある語形が正用であるか否かということを論じるものではなく，誤用という表現は避けたいためである。尚，竹林（2011）や国広（2010）ではいわゆる言語変化の最中である語形と，学習不足による個人的誤用（つまり言い間違いの類）を区別しているが，その個人的な「誤用」も，頻繁に起こるようになればそれは何らかの原因が想定でき，その語形の使用頻度が高まれば言語変化になる。そのため，個人的誤用と波頭型のものは，明確に区別できるものではないと考える。

1.2　研究方法

実例を採集するために本論文で用いたものは，『日本国語大辞典第二版』（以下『日国』），新聞記事検索（朝日新聞，毎日新聞，読売新聞），国会会議録検索システム，青空文庫，現代日本語書き言葉均衡コーパス，web 検索である。なお，検索エンジンは Google を用いた。

ある語形がどの程度普及しているかを正確に判断することは困難であるが，個人が自由に発信することのできるブログや掲示板などの書き込みとは異なり，整文や校正を経て活字化されている新聞記事や国会会議録，文学作品に現れた語形は，ある程度普及している（「ゆれ」以上ではある）と判断することとした。『日国』に見出しがある語については『正用』として扱われていると考える。

佐竹（1980）は雑誌などにみられる文体で，「～ちゃう」「じゃ」などの俗語形，終助詞の多用，挿入句の使用など，話しことばの形式が書きことばに持ち込まれたものを「新・言文一致体」と呼んでいる。後掲するさまざまな用例は個人のブログや書き込みから採ったものが多いが，その大半はこのような「新・言文一致体」で書かれており，書きことばというより，むしろ話しことばに近いとみなしてもよいだろう。

2．名詞をもとにした動詞形成

本論文では言語変化の先駆けとなる波頭型語形として，名詞から動詞が形成される例を取りあげて論じる。日本語では，名詞を動詞に変化させる手段として次のようなものがある。

(1) a．名詞（の一部）に「-r」をつけて動詞語幹を作る。
事故→事故る，事故った，事故らない
コピー→コピる，コピった，コピらない
b．名詞に「する」を付ける。
お茶する，スタバする，写メする　（影山　2011）

これが従来日本語で生産的に行われてきた名詞の動詞化である。このような方法で作られた動詞は日本語に広くみられるが，このタイプの動詞は「皮肉る」「牛耳る」のように 1910 年代から広く用いられ，文学作品や新聞記事でも頻繁に使われるものから，「サボる」「ダブる」のように口語での使用頻度は高いがフォーマルな場面では用いにくいもの，きわめて臨時的に作られるものなど多様であるが，これらは俗語的な性格の強いものが多い。

楳垣（1943）は，外来語の動詞化は昔からある便利な品詞転換法で，漢語の名詞，形容詞などに「－る」をつけて動詞（湿気る，など）を作ることは古くからあったと述べ，それを西洋語に応用したものとして「ダブる（落第する）」「バアバる（頑張る，野人ぶる）「コスメる（めかす）」「ステクる（散歩する）」などを学生語として挙げている。これらの中では現在ではもう用いられなくなってしまったものも多いが，当時盛んに「-r」型の動詞が作成されたことがわかる。

このような，元の名詞に何らかの要素を付加する方法で作られたものではなく，形の変化なしに名詞を動詞に変えた語形がみられることがある。それが名詞転成動詞である。以下でそのようなものについて記述する。

影山（1997）によると，英語には語形成過程の一つに「転換」(conversion）がある。これは単語の形はそのままにして品詞だけを変える操作で，名詞から動詞に転換することもできると述べられており，次のような例が挙げられている。

(2)　It was in Hokkaido that I milked a cow for the first time.
（私が初めて牛の乳搾りをしたのは北海道でした）

日本語では名詞をそのまま動詞として用いることは基本的に無理であると影山（1997）は述べており，名詞，動詞などの品詞が形態的に弁別される日本語では，純粋な名詞に述語の働きを負わせることはできない。そのため名詞と動詞の両方を明示した複合語という形態を用いて(2)の milk は「乳搾りをする」と表現することが必要になると説明している。

また英語では，名詞から動詞が作られる際に逆形成（back-formation）が起こることがある。島村(1990)は typewriter や windowshopping のように -er や -ing を伴う複合名詞から typewrite や windowshop のような動詞が作られることを逆形成の例として挙げている。

同じく，山根(1985)は book-keeping から book-keep，sightseeing から sightsee が作られた例を英語における逆成として挙げている。これらはすべて元の名詞から-ing が脱落して動詞化したものである。なお，同論文では日本語の逆成の例として「ごまかす」は名詞であった「胡麻菓子」が活用しはじめるに到って逆成された語であると指摘している。しかし『日国』に紹介されている用例では「ごまかし（初出 1871 年)」より「ごまかす（初出 1813 年)」のほうが古く，『大言海』では「ごまのはひノごまニ，まぎらかす，だまかすナドノ，かすヲ附けアハセタルナドニハアルマジキカ」と書かれているため，「ごまかす」が日本語における逆成の例として適当であるかどうかは疑問である。

2.1　日本語における名詞転成動詞

前節でみたように原則として日本語では純粋な名詞からそのままの形で動詞を作ることは困難である。しかし，本論文で波頭型の語形として取り上げるのは純粋な名詞ではなく，以下のように転成名詞（動詞連用形）を後部要素として持つ複合名詞が，再び動詞としての活用を持つ例が中心である。

2.1.1　動詞「ひた走る」

それぞれ進行の度合いは異なるが，すでに言語変化が完了し，変化後の語形が定着して「正用扱い」されていると考えられる例に「ひた走り」から「ひた走る」が生まれた例が挙げられる。『日国』によると，名詞「ひた走り」の初出例は(3)のとおりである。

(3)　ひたはしりにはしらうほどにとせらるるぞ　　（『漢書列伝竺桃抄』1458〜1460）

一方，動詞「ひた走る」は初出例が遅く，『日国』で見つけることのできるもっとも古い例は次のとおりである

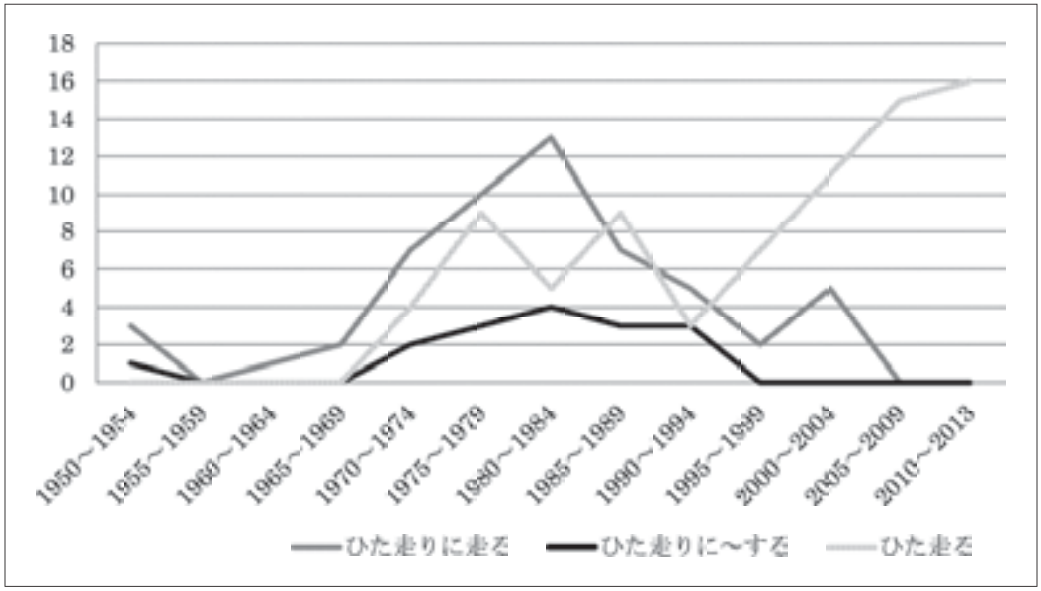
(4)　なにもかも焼き払はれたならどんなに快い気持だらうと思ひながら，おれはひた走った　　（今野賢三『火事の夜まで』1923）

国会会議録における動詞「ひた走る」の初出例は文学作品より遅く，1973 年の本会議に次のようにあるのが初出である

(5)　発想の転換どころか，超過密経済へひた走る高度成長路線を一そう強めていることは明らかであります。　　（1973　本会議）

国会会議録における「ひた走り」系の語の出現数の推移を次のようにまとめた。尚，「ひた走

り（を）する」は一例しか得られなかったため除外した。「ひた走りに～する」は「ひた走りに向かう」「ひた走りに進む」などが該当する。



ここからわかるとおり，1984 年ころまでは「ひた走りに走る」の語形が優勢であるが，それ以降「ひた走る」語形が増加し，現在は完全に「ひた走る」が優位となっている。2010 年以降でも，「岐阜の山中をひた走りに走って長野の白樺湖に向かいました。（毎日　2010）など用例は存在してはいるが，「ひた走る」にとってかわられてきていることが分かった。

2.1.2　動詞「ひた隠す」

変化が完了した語形として「ひた走る」を紹介したが，次に，限りなく正用に近づきつつも完全には普及しきっていないとみえる例「ひた隠す」について調査を行う。

名詞「ひた隠し」は『日国』に記述があり，初出例は次のとおりである。

(6)　何故今日までひた隠しに，それ程の恐しい経験を隠して居ったのでございませう

（芥川龍之介『疑惑』1919）

動詞「ひた隠す」について辞書には記載されていない。

国会会議録における動詞「ひた隠す」の初出例は(7)である。

(7)　しかも吉田総理は，この単独講和の陰謀さえもひた隠して，国会においても，この問題を審議することを極力回避せんとしているのであります。　（1950　本会議）

(8)　悪事をひた隠す，そういうことをまかり通させてはだめ。　（2002 年予算委員会）

「ひた隠し-て」という語形での出現は「ひた隠しに」と年代的にほとんど隔たりがないが，それ以外の活用形となると(8)のようにかなり新しい例になる。定着度の低い段階では動詞の活用は制限されることが予測される。

新聞記事を用いて調査してみると，名詞「ひた隠し」の初出例は，

(9)　ひた隠しにされる屈辱的条約改正　（毎日新聞　1878）

がある，ところが，動詞「ひた隠す」の用例は遅く，

(10)　主婦はねた警部の事故，救急車も呼ばずひた隠す　（毎日新聞　1989）

が初出例で，いずれも 1980 年代後半から 1990 年代前半が初出である。(10)は記事見出しであるが，本文には「県警は事故をひた隠しにしたうえ，けがをした主婦を救急車で運ぼうともせず」とあり，個人の中でゆれが発生しているものとみえる。

以上でみてきたように，動詞「ひた隠す」は名詞「ひた隠し」から 1980 年ころに作られた語形であると推測できる。新聞記事や国会会議録，文学作品にいくつかの用例がみられることから，いわゆる「個人的誤用」の類とは考えられない。また，「ひた隠そう」「ひた隠せば」のように活用しており，動詞として定着していると考えられる。しかし「ひた走る」に比べれば用例は少なく，国語辞書の記載もないことから，発展の途上にある語形と考えられる。

2.3　現在は使われていない名詞転成動詞

ここまで現代の名詞転成動詞について観察してきたが，参考までに現在使われていない名詞転成動詞についても記述しておく。

(11)　明朝は真暗な中に出かけて，盗賊を退治るつもりで出かけやせう
（『春色梅美婦禰』1841～42 頃）

(12)　詐欺師的株屋を是非とも退治なければならんです
（内田魯庵『社会百面相』1902）

(13)　手荒く料理（レウ）って，腥い骨だらけの鯛飯を焚き
（徳富蘆花『思出の記』1900～01）

(14)　をさなき人，まゐらまほしげにおもひたれば，さうぞかせていだしたつ
（『蜻蛉日記』974 頃）

(15)　御顔は色々にさいしきたまて，鏡に写れる影を見たまては
（『栄花物語』1028～92 頃）

(16)　うちそうどきてらうがはしくきこしめしなすを，とがめいでつつしひきこえ給ふ

（源氏物語』1001～14 頃）

(17)　うきよをば，ゆめとおもひて，あそぶこそ，しなねばのちは，こちくばかりよ

（『仮名草子』1627）

(18)　父に似て聖るべからず

（『貞享版沙石集』1283）

中世以前においても和語，漢語を問わず名詞から動詞が作られていたことがわかる。こうした素地があって現在の名詞転成動詞が生じた可能性はあるが，しかしこのような名詞転成動詞は一部が方言として残るほかは現在使われていないという問題があり，本論文で議論する種類の名詞転成動詞と直接かかわっているとは言い切れない

3．実例の収集と観察

第二章では名詞から動詞を作るとはどのようなことか，また日本語においてそれはどのように行われているかを観察した。以下では筆者が収集した名詞転成動詞について，用例を紹介するとともに分類を試みる。用例は，新聞記事や国会会議録，文学作品にあらわれるものを優先して紹介し，それらに見られず web 検索でしか得られなかったもののみ web 上の用例を用いる。分類は，こうした名詞転成動詞がすべて複合語であることから，前部要素と後部要素の関係に着目しておこなった。以下のように分類する。

（ア）様態を表す語句＋転成名詞
（イ）動詞連用形＋転成名詞
（ウ）名詞＋転成名詞
　(a) 前部要素と後部要素の間に格関係がないもの
　(b) 前部要素と後部要素の間に格関係があるもの
　(c) 前部要素の名詞が比喩的なもの
（エ）形容詞・形容詞語幹＋転成名詞
（オ）その他

3.1　様態を表す語句＋転成名詞

ここに挙げたものは，前部要素が後部要素の様態を表す語句であるものである。

(19)　今日は『廃工場のティンカー・ベル』をどどーんと平積んでくださってる書店さん

に（中略）なかなか平積みにならないんですよ。（中略）平積みを手にとってひっくり返して反対側も見ていただきたいワケで。なので，何が何でも平積んでいただきたいワケで！　（中略）何はなくとも平積みしてほしいの〜っ！！！
（ブログ　2012）

(20)　現在の俊市はふたたび克也のほうを見おろして苦笑った。
（真木健一『海豚座に捧ぐ百一発の砲声』1997）

(21)　上滑った所があるとしたらブシコーへのオマージュとご容赦願って…（朝日　1999）

(22)　生産のシェアを縮めてそういう過当競争の中に共倒れるという弊を避けてまいりたいという状態の中でいま呻吟いたしております　（国会　1966）

(23)　ゴリ押さないと仕事をやってくれないという事には慣れていたので，今回は早め早めにごり押ししていたんですが　（ブログ　2006）

(24)　憲法を改正すると聞くと，日本人は一瞬ドン引く。　（ブログ　2009）

(25)　ムカつく敵をズバババババッサリと斬り，斬り，メッタ斬るようなゲーム。そう！敵をメッタ斬る爽快感を追求したゲーム　（ブログ　2010）

(26)　片思ってしまうことってある？　（ブログ　2005）

(27)　「これで浮足立って空回らないようにまとめるのが自分の役目。」と気を引き締めた。
（朝日　2002）

(28)　食わず嫌ってる方はこの機会に是非一度お試しください　（ブログ　2011）

(29)　部下のむちゃぶりに，しっかりと答えてくださる上司の姿勢に脱帽であります
そして，『これからもどんどんむちゃぶってしまおうかしら』と，私の中の小悪魔が囁くのです　（ブログ　2011）

(30)　そう聞こえるんだとしたら，それはおまえに負い目があるからだろ。和人も八つ当たられてかわいそうに　（橘もも『夏は，夜』2004）

(31)　ちょっぴりミルキーな味わいに　気持ちよく，ほろ酔う。　（ブログ　2009）

(32)　13 日には，資材を運び込もうとする業者とピケを張りこれを阻止しようとする住民が小競り合う場面もあった。　（朝日　1992）

(33)　よっぽど疲れてるのか安心してるのかうたた寝た…と思ったら舞鶴に到着していた
（ブログ　2008）

(34)　もうこれ以上大切な青春時代を無駄づかってはいけない　（web サイト　2009）

(35)　東映は監督が音響監督の仕事もやるって細田とか関 P が言ってたっていうのをまたぎいたよ　（ブログ　2006）

(36)　そのために社員・役員一同，現場の仕事を何より大切にする下請ける集団としての意識とスピリットを徹底しております。　（ウェブサイト　日付不明）

(37)　慣用句で，そしり食ったり，後知恵を出したり，逆恨んだり，勘ぐったりする，身

分の低い者のことを指す言葉は何でしょう？　（ブログ　2008）

(38)　空振った衣緒の鉄棒が地面にめりこんだ。　（舞阪洸『神州天魔鏡』2002）

(39)　背後から一人の武士が，小走って来てすれ違ったが，抜き討ちに一刀に叩ッ切った。
（国枝史郎『娘煙術師』1975）

(40)　それまでテントの屋根を撫でるように小降っていた雨が，突如一気にこぼれ落ちてきたのだ。　（中林あきお『泣き虫男，歩いて日本一周してきます』2005）

(41)　まず輸出でございますが，二月あたりから六月あたりにかけて横ばっていたわけですけれども　（国会　1999）

(42)　小坂の着物は柄が分からなくなるほど血でずぶ濡れている。
（誉田哲也『吉原暗黒譚　狐面慕情』2004）

(43)　とかくバランス感覚に優れ，あらゆる方面でほぼ無駄がなく，ひとりよがらずエンターテイメントに徹す。　（ブログ　2007）

(44)　T シャツが一日生乾き臭く，耐えられずユニクロに行き「すいません，なまがわかないシャツください」と言って店員さんを困らせたり……　（ブログ　2012）

(45)　先延ばしの先行研究では，先延ばされる行動として〝学生にとって主観的に重要だと思われる学業課題〟を想定してきたものが多い
（筑波大学心理学研究第43号　2012）

（ア）類の例は，(22)や(36)のようなデスマス調の文体[1]の中や文学作品，国会会議録や新聞記事にも多く用例の見られるものがある。個人のブログや掲示板の書き込みなどと比べてフォーマル度の高い文脈にも表れやすいことから，このような語形は使用者にとってインフォーマルであるという意識が薄いことがわかる。

「ドン引く」や「無茶振る」のようなものはフォーマルな文脈では現れないが，それは言語変化の途上にある名詞転成動詞の性質によるものではなく，元となる名詞自体に俗語的な性質が強いためであると考える。

この中でも興味深いのは(19)(23)の例である，これらは一つの文章の中に動詞の形と名詞の形の両方が表れている。特に(19)は「テ」に接続する形として「平積みして」と「平積んで」の両方が表れている。個人の中でも「ゆれ」が起きていることがわかる。

3.2　動詞連用形＋転成名詞

ここに挙げるものは前部要素が動詞の連用形である。

---

[1] ただし，このデスマス調は「～していたんですが」など話しことば的な要素があるため「新・言文一致体」と考えたほうがよいかもしれない

(46) 褒め殺さず，一言でキメるのがよさそうだ （ウェブ記事　2010）

(47) このまま自分も事件の主役にされてしまうようでは野垂れ死んでしまうと悟り，進言を受け入れる気になった。 （朝日　1989）

(48) パパが作ってくれた朝ご飯を今からつまみぐうのである （ブログ　2010）

(49) なぜ延びをすると立ちくらむのでしょうか…。 （質問サイト　2003）

(50) シャリザーン皇子は，低い声で忍び笑った。
（ひかわ玲子『水晶の谷を越えて』1995）

(51) 酒をすすめ舞を舞ってもてなす。酔って居眠るのを見澄まし，一転，美女は激しく舞い上げて鬼になるべく山中に姿を消す。
（中森晶三『「能」が今，教えてくれること』1990）

(52) やむを得ないと泣き寝入つたろうが （国会　1953）

(53) 旅行の楽しみは，その土地の名物を食すことだと思い，旅に出たときはいつも食い倒れています。 （『市政だより天草』熊本県天草市　2008）

(54) 義経はこれを返り討つと，10 月 13 日に後白河法皇の御所に参院し叔父・源行家と共に頼朝追討の院宣を要請。 （wikipedia 郷御前の項　日付不明）

3.3　名詞＋転成名詞

ここでは前部要素が名詞であるものを観察する。（ウa）類は前部要素と後部要素の間に格係がない（または意識されにくい）もの，（ウb）類は前部要素と後部要素の間に格関係（ヲ格・ニ格）があるものである。（ウc）は前部要素の名詞が様態を表し，比喩性の高い（〜ノヨウニを補うことができる）ものである。

まずは（ウa）類の用例を見る。

(55) 私は昔から金縛り体質で，ちょっと生活リズムが崩れると，すぐに金縛られてしまいます。 （ブログ　2011）

(56) 足手まとうのはいつもです！ （ブログ　2010）

(57) 局長，私の話を勘違って聞かれたようですが， （運輸委員会　1962）

(58) 仲のいい友達でも一週間顔をあわせないと人見知る （掲示板　2006）

(59) 「初対面でハグ&キス」「人前で英字新聞を広げる」外国人かぶれた行動にイラっ！
（日刊 SPA！　2011）

(60) ものもらう[2] 女 （ブログ記事タイトル　2010）

(61) 足がよく「こむらがえる[3] かた」に。 （ブログ　2006）

---

[2] ものもらいができる，の意

(62)　日本の海運業が戦前のような国際的につばぜり合ったような競争力があるかどうか。　(内閣委員会　1962)

(63)　黒布にくるまれた美脚が，日焼けた野生的な腿や脹脛に抱かれて　(謡堂『魔が堕ちる夜　デーモニックスレイブ』2004)

「神隠す」「外国人かぶれる」などは用例も少なく，個人的誤用と判断しても構わないかもしれないが，ここで特徴的なのは「勘違う」のみが国会会議録にあらわれたという点で，「勘違う」は国会会議録に2例，新聞記事に1例，ウェブ検索では多数の用例が得られた。(ウa) 類の中では普及度の高い語形であることがわかる。その理由としては，「勘違い」という名詞自体が「神隠し」や「金縛り」「外国かぶれ」に比べて使用される頻度の高い語であることと，「間違う」という，意味も語形も類似した語からの類推が起こった可能性が考えられる。

また，ここでは転成名詞を後部要素に持つ名詞の中でも，「～(を) する」「～である」のような動作・や様態を表すものとは少々性格が異なるのではないかと思われる例として，「ものもらい」や「こむらがえり」がある。これらはひとまとまりの名詞としてある病気の名前を表しており，その点で極めて一語性が高いものなのではないだろうか。同様のことが，(イ) 類の「立ちくらむ」にも言える。

次に (ウb) 類である。

(64)　遊助〝言葉職人〟ぶりアピール「一字一句，響きにも気配る」　(スポ日　2012)

(65)　三宅の保健師，惜しまれ退職　避難民の健康に心配る　(読売　2004)

(66)　いじっぱってる必要なんてないんだ！　(ブログ　2012)

(67)　赤ちゃんがえっていた原因は？？？　(ブログ　2012)

(68)　困った時すら神頼まない不届き者の私に御利益はありますでしょうか。　(ブログ　2005)

(69)　概念として，協力削減社会を富の人格とすれば，争う消費錯乱社会も沙汰やむのではないないかと思います。　(書き込み　2009)

(70)　だから，照明設計は私がやって当然のこと。当初の設計を手ほどく。　(ブログ 2012)

(71)　国内2位の銀行では資本不足を穴埋めるため，6月30日までにGDPの10%に相当する18億ユーロが必要だ。　(ロイター　2012)

前部要素と後部要素の間に格関係があるものはほとんど見つからなかった。影山 (2001) に

[3]　こむらがえりを起こす，の意

も述べられているとおり，「目的語＋動詞」の複合語において「花見（をする）」から「*花見る」のような複合動詞が作られることはほとんどない。また，「主格＋動詞」の複合語，たとえば「雪解け」から「*雪解ける」が作られることもないようである。格関係があると，たとえ助詞が形式上脱落していても，名詞と動詞の間に強く境界が感じられ，一語化することが困難になるため逆形成が起こりにくいのではないだろうか。

「気配る」「心配る」については，「気配り」「心配り」という名詞から作られたものであるのか（言い換えれば，一語であるのか），単に「気を配る」「心を配る」の格助詞「を」が脱落しただけのものなのか文字表記では判別がつかない。

それに対して「いじっぱる」などは，連濁を起こしていることから「意地をはっている」の「を」が脱落したものであるとは考えられず，名詞「意地っ張り」から逆形成したものであることがわかる。

以下は（ウc）類の例である

(72) 彼らは僕が毎年狸寝入っていることを知らない。（ブログ　2005）
(73) 血糖値うなぎ登ってます（ブログ　2010）
(74) 18日の1部をみて大阪にとんぼがえって嵐コンを考えています。（ブログ　2008）
(75) 内なる幸せのために，政権を取りかえ，大臣ポストをたらい回す。（朝日　2000）
(76) PEPSI DRY を大人買う。（ブログ　2011）
(77) びくり，と人影が海老反った。異音は明らかに人の呻く声だった。
（小野不由美『屍鬼』1998）
(78) 梅雨末期，最後の大雨をどしゃぶらせてるwって感じでしょうか…。
（ブログ　2010）
(79) 単に選択肢をしらみつぶすだけではクリアできない奥深さを作り出すことに成功した一方（ブログ　2012）
(80) さて，野放している母親はというと（中略）野放す育児をあきらめてはいない。（中略）野放してもいい環境を整えることに努力をするつもり。（ブログ　2011）
(81) 矢張一種の功名心を根絶（ネダヤ）す事が出来なかったのだね
（永井荷風『野心』1902）
(82) 国の税金を何に使おうが自由という言い分よりもっと酷いことを鵜呑めと言ってる。（ブログ　2012）
(83) どうなっているのかと心配しながら新空港プロジェクトをやぶにらむ事にしたが
（ウェブサイト　1998）

（ウc）類は前部要素の名詞が比喩的に後部要素の様態を表している例である。「たらい回す」

「えびぞる」以外はweb上以外では発見できなかった。「えびぞる」については，沢木（1980）に最近はやっている言葉として，歌舞伎用語である「えびぞり」という名詞から「えびぞる」という動詞が作られたものがあるということが紹介されている。

3.4　形容詞・形容動詞語幹＋転成名詞

ここでは形容詞語幹が前部要素として現れている例を挙げる

(84)　それから2番目の値も，変更前は1だったのですがCFStringBuiltInEncodingに含まれていませんね。気になります。深追わないとつかめなさそうですね。

(85)　私は，最近は死というものが余りにも遠くなってしまい若者が生を軽はずむ傾向にあるのを嘆いていました。　（ウェブサイト　2008）

(86)　右手で簡単に状況に合わせチェンジしてゆけたら「もんのすごい陶酔」が生み出せる，とも悪だくらんでおったのです。　（ウェブサイト　2009）

(87)　そんな高笑う声が境内から前の大路へと弾むようにして消えて行く　（小野里祐『空也念仏』2001）

(88)　車検が安上がるのは，一般的にディーラーでしょうか　町中の自動車修理工場でしょうか

「形容詞語幹＋動詞連用形」から作られた転成動詞は前部要素が様態を表すという点では(ア)類と共通しているが，(ア)類は用例の種類も多く，きわめて普及度の高い語形もみられるのに対して（エ）類はそうではない。この差異は何に起因するものだろうか。

3.5　その他

(89)　ゆとり世代だからって何もかもゆとってるわけじゃねぇんだからな　（ブログ　2012）

(90)　娘は機嫌が悪かったのか「ぐっじょばない！」と切れられた　（ブログ　2006）

(91)　ではでは…おやすまないようですが…頑張って下さい！！」　（ブログ　2009）

(92)　「だいじょうびません」とは　まさか言えないので，「は，まぁ一応,,,,」みたいな返事をしておく。　（ブログ　2005）

(93)　これ見よがす日記　（ブログタイトル　日付不明）

(94)　油断のならない世の中だ。だまされてはいけない。おためごかして自分が得になることしか考えていないんだから。　（読売新聞　1988）

(95)　ちょっとしょんぼる（´・ω・`）　(2009)

(96)　ありとあらゆらないトレジャー　(2005)

これらの例は，もともと後部要素に転成名詞を持たないか，「おやすみ」「おためごかし」のように，元の動詞がきわめて意識されにくいものである。そのため，このような例は用例も比較的少なく，国会会議録などのフォーマルな場面には現れず，もっぱらウェブ検索の個人のブログ上で収集した実例である。

これらをさらに細かく分類するなら，ウ段で終わる名詞類（ぐっじょぶ・だいじょうぶ・あらゆる）と，イ段で終わる名詞類（ゆとり，おやすみ，これみよがし，おためごかし，しょんぼり）に分けられるだろう。

先述したとおり，日本語では純然たる名詞をそのまま動詞にすることは基本的に許されない。そのため本来「-r」を付与して動詞語幹を作るか，軽動詞「－する」を伴う必要がある。しかしこれらは，名詞の最後のウ段を終止形，イ段を連用形に見立てて，直接に活用させている例である。

「めぐむ」という動詞からは「めぐみ」という転成名詞を得ることができる。その内的規則が話者の意識にあれば「ゆとり」という名詞の背後に「ゆとる」という動詞の存在を想定することは不自然なことではない。さらにこの「ゆとる」という語は，「ゆとりがある」の意ではなく，「ゆとり世代らしい性質を持っている」という意であるようである。

4．出現条件の考察

前章では，日本語における名詞転成動詞の例を分類し，観察してきた。第4章ではこのような語形がどのような理由で出現したかを考察する。

従来とは異なった語形が生み出される理由として，第1章で「言語使用上の不都合を解消するための言語変化」「学習不十分による誤用」などを挙げたが，ここまでで見てきた名詞転成動詞は分類によって普及度の差が大きく，また個人の中でゆれている例もある。従来の語形が新しく生まれたものに淘汰されつつある様子もない（ただし「ひた走りに走る」のように，新語形に駆逐されつつある語もある）。そのため，「やむにやまれぬ変化」であるとは考えにくい。しかし，一部は完全に定着しており，無秩序に発生した語形であるとは考えられない。そのため単なる「学習不十分による誤用」でもないと考える。第4章では，これまでの観察を踏まえ，日本語における名詞転成動詞を竹下（2011）の「言語使用上の大きな不都合を解消する変化ではないが，それなりの理由•必然性があって生じた言葉づかい」であると仮定して議論を行う。

まずは，日本語において名詞を動詞化することについての今までの研究を紹介する。

4.1　先行研究

町田（2009）は「名詞＋動詞の連用形」という構成の名詞は存在するが，「名詞＋動詞」という構成の動詞は日本語の正式な単語としては認められていないと述べている。その理由として

「名詞＋動詞」という日本語の表現があると，前部要素の名詞は主語や目的語などの何らかの働きをしていなければならない。しかし，日本語では通常そうした働きは格助詞を用いて表すのが原則であるため，格助詞のない言い方は正式な表現として認められない，と説明している。ただし，前部要素が様態を表す語である場合は，それがどのような働きをしているか大体のところ正確に推測できる。格助詞のような特別の単語がなくても前部要素の名詞がどのような役割を果たしているか判断できるのであれば，このような「名詞＋動詞」という構成の動詞が使われるのは不思議ではないと述べている。

ここでは前部要素が名詞である場合にしか触れられていないが，本論文の第 3 章で挙げた実例を見てみると，確かに（ア）類のように前部要素が様態を表すものは用例が多く，普及度も高いものが多い。前部要素にあるものが名詞であるのは（ウa）（ウb）（ウc）であるが（ウb）類の格関係を持つものは，それ以外に比べて成立しづらい。

(97)　雨降り→*雨降る（雨が降る）
　　土砂降り→土砂降る（土砂のように降る）

上の例は，どちらも「名詞＋降る」という形式をとるが，「雨降る」は（動詞としては）用いられず，「土砂降る」は用例を発見することができる。このことから，「名詞＋動詞」の名詞の部分は動詞の様態として解釈されなければならず，主語や目的語であってはならないということがわかる。同じことが，後部要素に「買う」が来る場合でもいえる。

(98)　大人買い　→　大人買う（大人のように買う）
　　安物買い　→　*安物買う（安物を買う）

このことから，「名詞＋動詞」の複合語は，前部要素の名詞が様態を表すことを強く要求するものであることが推測できる。

国広（1995）では「おもてなす」「横這う」が取り上げられており，これは本来［お［もてなし］］，［横［這い］］という構成だったものが，［おもてなし］［横這い］とひとつの語として語構成が再分析されたがための現象であると説明している。

これに類似した例として山根（1985）は「本来切れるはずのないところで切ること」として異分析を挙げており，通常これは無意識のうちに誤って類推した結果造られるものであるが，この類推を意図的に行うと言語遊戯を生むことになると述べ，またこの言語遊戯を行うためにはその言語を母語とするものが持っているはずの内在規則が前提となる，と述べている。

影山（1993）は「飲みに飲む」という重複構文について，内部に「に」を含むという点では句のように見えるが，「*飲みにサエ飲む」のような副助詞の介入や「*飲みに，課長は酒を飲ん

だ」のような統語的移動が不可能であることから，語に特有の形態的緊密性を備えているように思えると述べている。加えて，重複された部分に接頭辞が付く（ひた隠しに隠す）という事実から，この重複が形態的操作であることが示唆されていると述べ，「飲みに飲む」のような重複構文全体が語を構成していると仮定している。国会会議録で得られた用例に「ひた走りに高度経済成長の道を走った（1980）」がある。これは重複構文の内部に別の要素が介入している例である。また，かなり早い時点から［ひた［走りに走る］］ではなく，［［ひた走りに］走る］と異分析されている証拠として，「ひた走りに向かう」「ひた走りに進む」のような例があり，これは二つ目の「走る」が類似の移動性を持った動詞に置き換え可能であることを示しており，「走りに走る」が一語と見なされなくなっていることを示唆している。

また，梶尾（2010）は「-r」型の動詞形成について次のように「効率化」という観点から説明している。

> 「愚痴る」とか「皮肉る」という表現を考えてみると，愚痴や皮肉を司る「いう」という動作は，「愚痴」や「皮肉」という名詞のなかにある程度含まれているから，あえて「言う」と動作の種類を限定しなくても，「する」という動作の一般系をくっつけておけば用が足りる。すなわち，「愚痴を言う」あるいは，「皮肉を言う」の「を言う」の部分で付け加わる意味が「動作をする」という程度であるならば，つけるのは「る」だけで十分であるから，わざわざ三音も費やすのは無駄だというのが，効率化の感覚である

4.2　言語の経済性による変化

ここから「ひた走りに走る」が「ひた走りする」を生み出した経緯を次のように分析する。

もともと［ひた［走りに走る］］であったものが，［ひた走りに［走る］］と異分析される。その後，効率化という観点から，重複している［走る］の部分を削除されたのだ。そこで，「ひた走り（に）」が生まれた。さらに，これらの複合名詞は後部要素が元は動詞であるため，軽動詞「する」を用いずに直接活用させても構わないという類推が働くのは自然なことである。

これは経済性（または効率化）の原理にかなっている。「ひた走りに走る」という負担の大きい語形を「ひた走る」に変えて効率化できるのであれば，これは十分に妥当な語形変化であり，普及度が高いことの説明がつくだろう。

このような，経済性の原理に基づいた言語変化は，言語使用における著しい不都合を解決するものではないが，語形がより簡略になるという一定の効果はもたらしている。古くは「ひた走りに走る」であったものが，現在は「ひた走る」という形式でも「正用」扱いされるに至っていることから，特に「様態を表す接辞＋転成名詞」の名詞転成動詞は，今後より普及してゆくのではないかと推測する。

4.3　言語の創造性による変化

次に，効率化とは別の原理によって変化がもたらされたと考えられる例である。

（ウc）類の比喩的な前部要素を持つものについては，「様態的である」という点で（ア）類と共通しているが，生産性や普及度，フォーマル度では劣る。それはおそらく，（ウc)類の動詞を用いる動機として，言語遊戯というほどのものではないにせよ，ある種の新規性を求める心理が働いているものであると考える。つまり，この言語変化は創造性に基づいているのである。

「たぬき寝入り」「堂々巡り」などは固定した慣用表現である。そのため使用者の感覚として「使い古された語」であるという意識が働く。そこで，従来どおりに名詞として用いるのではなく，あえて動詞として使うことで，新しさを演出しているのではないだろうか。

言語遊戯，または新規性を求めて作り出された例としては（オ）類がある。梶尾（2010）では，著者の周辺では「さえずる」という表現が使用されており，これは「さえずる」という動詞ではなく元々「さえずり」という筆者の行きつけの居酒屋の名前であると述べられている。本文ではこの「さえずる」の意味は記されていないが，さえずりという居酒屋に行って飲食することであることが容易に推測できる。

こうした語形は，仲間内で共有するものであり，フォーマルな場で用いるものではない。それは，日本語の規則（名詞をそのまま活用してはならない）に違反するからである。店名である「さえずり」は固有名詞であり，本来動詞として活用してはならない。第 3 章で（オ）類として挙げた例はすべて名詞（「あらゆる」のみ連体詞）として固定されているため，本来は活用を持ってはならない。

このように創造性に基づく変化が従来の規則に違反しているのは確実であるが，しかし無秩序に発生するものではない。（オ）類の名詞はすべて「動詞に見立てる」ことが可能なものである。さらに，活用形も制限されていることがある。「だいじょ（う）ぶ」を例にとって述べると，「だいじょうばない」「だいじょうびます」「だいじょうべ」という形式はあっても，連体形として「だいじょうぶ事」という用法は見つからない。これは語形が変化せずインパクトを演出できないからとも考えられるし，文字表記の上では「大丈夫＋事」という単なる名詞複合に見えてしまうからであるとも考えられる。また，テ（デ）形に接続すると「だいじょ（う）ん－で」という形になるはずであるが，この形式は今のところ見つかっていない。おそらくバ行の子音が消滅してしまうことによって，「だいじょうぶ」というもとの形が想起しにくくなるためであろう。まだ動詞として定着しきっておらず，活用が自由でない可能性がある。

また，このような名詞転成動詞が作られる前段階として，「る」で終わる名詞を動詞化したものが考えられる。今まで述べてきたように，通常，名詞を動詞化する際は「-r」を付加して語幹を作る。ところが「ダブル」「ドッペル」「貞治」のような「る」で終わる語は「*ダブルる」「*ドッペルる」「*貞治る」とはならず，最後の「る」を直接活用させて「ダブら－ない」「ドッペら－ない」「サダハら－ない」となる。これを拡張して，最後が「る」に限らずウ段で終わっている

名詞であれば動詞化することができる，と類推した可能性がある。

山根（1985）は，逆成について，本来切れるはずのないところで切るという意味では異分析の範疇にはいるものであると述べ，英語において逆成によって創造される語は通常の形態素付加をへて作られた語の数に比べると少ないことから，「目立った」語形成過程であり，逆成は有標，形態素付加による通常の語形成過程は無標としてとらえている。

これは英語における記述だが，日本語においても同様に考えられる。つまり，名詞から動詞を作り出す際の手段として「-r」「－する」型が無標であり，名詞を転換させるものが有標である。

規則に違反することで「目立たせる」ことができるのであれば，それは使用者に，規則に違反しているという意識があることの証拠でもある。つまり，「言語に対する知識の不足による誤用」ではない。従来からの日本語の規則を踏襲しつつもあえてそこから逸脱するところに面白さを見出すわけである。また，こうした造語法はまったくの新語とは異なり，日本語話者であればおおむね理解できるという特徴があり，今後も（個々の語の流行り廃りはあるであろうが）普及する可能性がある。

5．おわりに

本論文では，第１章で「進行中の言語変化」について概観し，第２章でその具体例として名詞転成動詞を紹介した。第３章で実際の用例を分類し，第４章でその内容を検討した。

日本語における新しい名詞転成動詞にはさまざまなタイプがあるが，「様態を表す接辞＋転成名詞」という型がもっとも生産的であることがわかった。また，そうした名詞転成動詞が創造される動機として「経済性」の原理，つまりできるだけ運用に負担がかからない語形にしたいという欲求と，「創造性」の原理，できるだけ新しく，目立つ形にしたいという欲求の両方があることを述べた。ここで取り上げた名詞転成動詞は，個々の語に流行り廃りはあると考えられる。しかし，今後も多くの語に転成が起きていくだろうと結論する。

（ささき　かおり・言語文学専攻）

参考文献

井上史雄（2008）『社会方言学論考 ── 新方言の基盤 ──』明治書院
楳垣實（1944）『日本外來語の研究』増補版　青年通信社
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
影山太郎（2001）『日英対照　動詞の意味と構文』大修館書店
影山太郎（2011）『日英対照　名詞の意味と構文』大修館書店
影山太郎・由本陽子・中右実（編）（1997）『語形成と概念構造』（日英語比較選書８）

梶井厚志（2010）『コトバの戦略的思考：ゲーム理論で読み解く「気になる日本語」』ダイヤモンド社
国広哲弥（1995）『日本語誤用・慣用小辞典〈続〉』講談社
国広哲弥（2010）『新編日本語誤用・慣用小辞典』講談社
佐竹秀雄（1980）「若者雑誌のことば ── 新・言文一致体」『言語生活』343，pp. 46-52
真田信治（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版
島村礼子（1990）『英語の語形成とその生産性』リーベル出版
竹林一志（2011）『これだけは知っておきたい言葉づかい　時とともに言葉が変わる理由』笠間書院
新野直哉(2011)『現代日本語における進行中の変化の研究 ──「誤用」「気づかない変化」を中心に ──』ひつじ書房
町田健（2009）『変わる日本語その感性』青灯社
松本曜（1988）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114：pp. 37-83
山根一文(1985)「類推による創造について ── 逆成を中心として ──」『福岡女子短大紀要』29, pp. 65-72
由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語　モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房